
コイスルキモチの短編集

ma.na

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイスルキモチの短編集

【Nコード】

N4722G

【作者名】

ma·na

【あらすじ】

某お題配布サイトから100のお題をお借りしてそれを元に短編集小説を随時upしていきます。他の小説は基本的にキミがいればからの続編カップリング新哀ですがこちらは新哀、コ哀、新志、コ志ごっちゃまぜです。■PV200000、ユニーク70000アクセス突破しましたありがとうございます！■このたびHP開設しました。ここで投稿したものに手直しを加えたり、新たに書き下ろしたりしていますので是非遊びに来てください<http://id43.fm-p.jp/251/sherry2star/>

1・撫でる楽しみ(前書き)

カップリング新哀です。年齢設定はご想像にお任せします W

1・撫でる楽しみ

「哀…髪伸びたなあ…」

最近の哀は以前のショートボブを保たずに肩口を軽く超えるロングヘアになりつつあった

ウェーブをかけるのもやめて、綺麗な赤茶の髪が歩く度にサラサラと揺れる。

「お気に召さないかしら？」

だからなんだ、と言わないばかりにジト目で哀は新一を見返した。

髪を伸ばす事を決めたのは「灰原哀」として生きる決心をしたからでもある。

宮野志保と同じに成長してはつまらない。

それに…

新一の隣にいられる自分を少しでも女らしく、美しく見せたかった。
『ませた子ども』 としか世間には見られないとしても…

「いや、オメーが髪伸ばすのちよつと意外だったからよ。手入れとか大変なんだろう？」

確かに、ロングヘアはトリートメントにも気を使うし、朝も大変だ。それでもただ一言新一に可愛いと言って欲しかった…なんて言えるはずもなく…

「ええ、そうね…そろそろ鬱陶しいしまった切ろうかしら」

なんで

『女のこらしくしたかった』と言えないのだろう。

なんで

『貴方に可愛いと思ってほしくて伸ばした』と言えないのだろう…

こんな言い方したら好きにしろと言われるに決まってる。

そして、自分もそうすると言って切ってしまう…

が、耳に飛び込んできたのは意外な言葉。

「切っちゃうのかよ!? 勿体ねえ！」

「…勿体ないって何よ」

素っ気なく返事をするが小さな胸が トクン トクン と音をたてる。

次の瞬間ふわりと新一に包みこまれて耳元で囁かれた。

「哀のその髪すげえ可愛いし…俺の撫でる楽しみとらないでくれよ」

そう言って哀の髪を暖かな大きな手で包みこんだ。

1・撫でる楽しみ（後書き）

評価・感想お待ちしております♪どの話に対しても書いていただけるとありがたいです☆

2・甘い甘いご褒美（前書き）

CPコ志です。感想・評価お願いします

2・甘い甘いご褒美

志保の前には食べかけのブランデー入りチョコレート。

博士がアメリカにいては何もしてやれないからせめて、と送ってきたものだ。

お気に入りのファッション雑誌を眺めながら工藤家自慢のサイフォンでいれたコーヒーを片手に志保は大事そうにそのチョコレートを頬張る。

どうせ彼は少年探偵団と帰りにサッカーにでも行ってまだ帰ってこないだろう。

中身は先日20歳になったけれど見た目は10歳の彼にブランデー入りのチョコレートを与えるのはあまりよくない気がする。

『俺は江戸川コナンとして生きるよ。俺の成長…待っててくれるか？』

『あら、ずいぶんと気の長い話ね…』

皮肉のように言っただけで結局志保はコナンの成長を待っているし、

今もこうして彼の帰りを待っている。

それは彼の人生を変えてしまったことへの償いでもあり
同じに志保自身の幸せでもある。

最後のいつこに手をかけた瞬間

「ただいまー！ あっ志保何食ってんだよっ」

まだあどけない少年の姿だけどいつもいつでも私を守ってくれる人。

「お子様には縁のないものよ。お酒入ってるんだから…」
そういつて志保は最後のひとつをひょいと口に運んだ。

「ちえ…今日はお前が家にいるってーからアイツら撒いて早く帰って
きたってーのによお…」

「そう…ならチョコレートはもうないけど…」

そう言って志保はコナンの腕を軽々と引き寄せそっと口付けた。

いつも守ってくれる小さな貴方に
ー甘い、甘い…ご褒美ー

2・甘い甘いご褒美（後書き）

初！コ志に挑戦してみました。私の描く作品では哀嬢も志保嬢も新一くんには勝てない傾向があるので…相手をコナンくんにしてみましたがいかがでしょうか？

3・夕暮れに手を繋ぐ（前書き）

CPは新哀だけど本編小説たちとは若干設定違います

3・夕暮れに手を繋ぐ

「は…灰原さんっ好きです！付き合ってくださいっ」

顔を真っ赤にして思いを告げる少年とため息をつきながらそれを聞く端正な顔立ちの少女。

帝丹中学校の放課後の中庭。いつもの光景が繰り広げられていた。

「気持ちには有難いけど…私あなたの事をよく知らないし、付き合ってる人がいるから。」
これもいつもの台詞。

大抵の男子生徒はここで引き上げるのだが、今日の男は無神経な上しつこかった。

「灰原さんいつもそう言ってるみたいだけど…いつも帰りは吉田さんと一緒にひとりだよ？彼氏と帰ってるとこなんて見た事ないけど本当に付き合ってる人がいるの？」

……………。

新一は探偵業で忙しいし毎日家で顔を合わせる。

一緒に下校、なんてもちろんした事がないが

中学生にとって”付き合っている”の定義は一緒に下校する事なのだろうか。

「本当は彼氏なんていないんじゃない？あまり知らなくてもこれから俺の事を知ってってくれたらいいから！毎日一緒に帰ろうよ！」

哀だって同級生たちが

―例えば親友の歩美とその恋人である光彦が―

一緒に下校している姿を見て少しは羨んだこともある。

自分は志保の時にだって、普通の学生生活を送っていなかった。
当然そんな経験をした事はないのだから…

「悪いけど、付き合っている人がいるのは本当よ。ごめんなさいね。
友達を待ってるからもう行ってくれるかしら。」

取り付く島のない哀によく男子生徒はすごすごと帰って行った。

「もおー哀ちゃんてば言っちゃえばいいのに！あの工藤新一と付き合ってるって！」

物陰で哀を待っていた歩美は「それにしても今日は長かったあ…」
なんて言いながら彼という人を持ち出してしまえばいい、といとも簡単に言う。

「昔からの友人の貴方たちにしか言っていないのよ？なんで今日初めて見たような男の子に言わなきゃならないのよ。」

本当は言いたい。

手を繋いで帰ってみたい。

だけど…

何考えてるのかしら私。

数え切れない程の幸せを毎日彼にもらってるのに…

人間は欲深い生き物ね。

どんどん我が儘になってるわ…

「あっ新一お兄さんだ！」

親友の声でふっと我に返る。新一？　そういえば…今日昼間サイレンが聞こえたけど関係してたのね…

「おう、歩美ちゃん久しぶり。今日哀の隣歩いて帰っていいかな？　たまにはさ。哀と放課後デート♪」

「…買い物。付き合ってね。特売日なんだから」

ジト目を向けつつ頬が緩む。

親友はそれはうれしそうにこちらを見ている

そして

夕暮れに、手を繋いで…

4・深い森の迷路（前書き）

新志未来設定です。

4・深い森の迷路

「あきらにいちやあん…こわいい…」

「バーロ。泣いてもパパとママが来てくれるわけじゃないんだから！早く戻る方法見つけるぞあい！」

幼い兄妹はもう一時間近く森の中をさまよっていた。

兄である明にはわかっている。

自分の両親は心配して探しに来たりしない。

ただ、信じて帰りを待ってくれるから。
よくやったって抱き上げてくれるから。

だからぼくがんばる！（主にママに抱かれたい

「志保！うちのちびっこ名探偵たちはまたお出かけか？」

「ええ、さっきから右折しかないものだから同じ場所をぐるぐるまわってるわ」

パソコンで我が子たちの現在地を確認しながら志保はクスッと笑いをこぼす。

20歳と21歳という若さで籍を入れたふたりは6歳になる明と4歳になるあい。ふたりの子どもに恵まれた。

「そっか…まだ帰ってきそうにないなら志保…そろそろ3人目…どうだ？」

首に腕を回してきた新一を志保は軽く振り払った。

「あの子たちが帰って来るのを待ってるんだから今はダメ。それに…」

「それに？」

「…次こそ子どもの名前、コナンにするわよ。」

いつまでたっても夫婦漫才の夫婦のもとに泣きべその少女とママまつしぐらの少年がかけてくる

「おう、名探偵どもお帰り。」ひよい、と新一は明を持ち上げた

「いいかぁ〜明。明はなあ、パパとママにとって大事な存在だ…だけどな」

「ママだけはパパのもんだ。譲れねえぞ」

小学生の息子と本気で妻を取り合う旦那がどこにいるっていうのよ…あいの頭を撫でながら志保はふうつとため息をついた。

「オレはあの深い森の中をあいを守って探険してきたんだぞ！」

「バーロ。裏庭でぐるぐる回ってただけなんだよ。ママを守るのはパパの仕事だ。」

「パパよりオレのがママのこと好きなんだいっ」

最近の明はあの頃の彼に本当に似てきた。

だからたまにドキツとする…なんてことは志保だけの秘密。

「ねえママーごはんたべたいよー」あいが志保の服の裾を引く

「そうねえ…パパとお兄ちゃんはごはんよりケンカが好きみたいだからふたりで食べましょうか。ふたりにはレーズンでも渡しておけ

ばいいわね。」

男性陣が一気に凍りついたのは言うまでもない。

工藤家ではママが最強。

4・深い森の迷路（後書き）

リクエストにお答えして新志にチャレンジさせていただきました！
長男明くんは明美おねーさんからお名前をいただきました。コナン
はさすがに…；

5・プラネタリウム（前書き）

コ哀原作設定です。

5・プラネタリウム

東京の空は明るい。

明るすぎて星明かりなど届かない。

(…お姉ちゃん…)
バカげていると思う。

死者が星になる、などというおとぎ話のようなこと…

それでも哀は毎晩空を見上げる。

…お姉ちゃん…お姉ちゃんの側に行くには、私も………

…バカね。罪人の私は星にもなれやしないわ…

そろそろ帰らないと、抜け出したのが博士にわかってしまうかもしれない。

夜の公園のベンチから哀は腰を上げ阿笠亭へと足を向けた。

と、その時携帯電話が鳴った。

メール受信…江戸川 コナン

『明日放課後空けとけ!』

…偉そう。

でもうれしいと思ってしまう自分を否定できなかった。

『わかったわ。』

用件だけのメールに用件だけのメールを返す。

次の日、彼に連れられて来られたのは鈴木財閥が新しく作ったオーブン前のプラネタリウム。

「まったくガキンチョが色気づいて…園子様と親友な蘭に感謝なさい」

「ありがとう、園子ねーちゃん！僕誰もいないところで見て見たかったんだ」

私を連れてきた本人は”子ども用”の笑顔と口調を鈴木財閥の令嬢

へと向ける。

「…ちょっと、どういうこと?」

誰もいなくなり照明が落とされたところで彼に問いかける。
何のつもりなのかさっぱりわからない。

「オメーさ。毎晩家抜け出してたろ。博士は理由がわかんねえとか
言ってたけど…時間帶的にお姉さんのこと考えて星でも見てたんだ
ろ? でもこの辺じゃ星なんかさっぱり見えねえしな。んで、人が大
勢いるところはオメーが嫌がると思って園子に頼みこんだっつーわけ。
感謝しろよ?」

このフェミニスト。とは思ったがさすが鈴木財閥。

綺麗な星明かりが天井に映し出された。

「…りがと…」

綺麗な星明かりと
束の間の、あなたの隣。

5・プラネタリウム（後書き）

今回のお題はかなり手こずりました…楽しみにしていたたいてた方
微妙な作品になってしまってますみませんm（
m

6・うさぎの心(前書き)

歩>コ哀

まだ恋愛未発展の設定です

6・うさぎの心

うさぎは寂しいと死んでしまう、なんていうおはなしを聞いたことがある。

誰かが近くに来てくれないと、自分を見てくれないと。。。

確かに寂しいろ思うけど・・・

でもね、好きな人が自分を見てくれてなくなつて、寂しいけど、寂しくない事だってあるんだよ。

私、吉田歩美。小学校5年生。それでも結構男の子に人気あるんだから！

幼馴染ですごくかっこいい男の子江戸川コナンくんずっと片思い。

小学校低学年の時は私とコナン君は結ばれる運命なんだ、って漠然と信じてたけど、最近歩美もう子どもじゃないんだよ？わかるんだ、コナン君が歩美のことを見てはいないことくらい。

ほら、だって今日もコナンさんの視線の先には・・・

「おい、灰原。」

「何よ。朝から煩いわね。」

灰原哀ちゃんは歩美の親友。

歩美の気持ちを知ってるから自分の気持ち、隠してるみたい。

でも、歩美だって同じ人が好きなんだもん。

哀ちゃんのこと見てればわかるよ。

なのに、「彼のことはそういう対象としては見てないわ」の一点張り。

哀ちゃんって素直じゃないんだよねえ・・・

そろそろ、歩美が背中を押してあげなきゃダメかなあ。

歩美は

哀ちゃんとコナンくんがしあわせな姿を見れば寂しくないから。

そうやって心を埋められるウサギさんもいるんだよ？

さあて、コナンくんより哀ちゃんのが頑固そうだから哀ちゃんにどうやって説得したらいいかなあ。

7・桜舞い散る季節

満開の桜を見上げるあどけなさで大人びた雰囲気併せ持った少女。

…かわいい！やべえ。

これから毎日あの格好で帰ってくるのか？

高校生になるまでは…と思ってたのに…

哀、お前可愛いすぎ。反則。

「新一。遅刻するんだけど。」

哀の声でハッと我に戻る

いかんいかん。今日は哀の入学式。

入学式といえば出会い。

なんとしても哀には俺がいるという事を周りに知らせて変な虫がつかないようにしなければ！

「…にしてもオメースカート短すぎねえか？」

「別にしたくてしたわけじゃないわよ。吉田さんが同じにしたいって言うから…それに気にする程の短さじゃないと思うけど。」

気にするんだよ！俺は！

お前はただでさえ周りを圧倒する美人なんだ！その上スカート短くしたら見られるじゃねえかつ！

そんな俺の不安をよそに米花中に着くと

「あ、新人生はあっちみたいね。じゃ。」と繋いでいた手を哀はすつとほごいた。

「哀！終わったら…」

「そこで待ってろ、でしょ。貴方の言う事はいつも同じなんだからいちいち言わなくて結構よ」

…可愛いくなえ。でもすげえ可愛い。やっべえ…

絶対入学式で注目の美女じゃねえか。

新一の嫌な予感は的中した。

入学式の最中、他の小学校から入学した男子生徒や在校生は哀に好意の視線を注いでいる。

それに気付かないから哀は困る：自分が美人だという自覚がないのだ。

：ガキ共に負ける気はしねえけどよお：

それでも、大学を卒業し探偵事務所を自宅で開いたばかりの新一は心配で仕方なかった。

依頼は思ったより多く、忙しい日々だ。

全ての依頼を受けるわけではない。
できるだけ自宅を空けずに済み、且つ新一の興味を持てるもの

いっだって最優先は哀だ。好きでやっていた探偵を仕事としたのも哀との生活を思っ、だ。

そんな事を考えていたら入学式が終わっていた

任意参加の保護者会に出ているヒマなどない。

早く哀を連れて帰らなければ。

校門の前で待つ哀のもとに向かうともう数人の男子生徒に囲まれて

いた。

哀は適当に相手をしている。

…すんなよ…頼むからすんな…

グッと哀を抱き寄せるー

「俺の女に何か用かな？」

『…工藤新一!!?…?』

複数の声が重なる。

…呼び捨てかよ。最近のガキは…

「ちょっと新一…」

哀は何か言いたげだったがそのまま唇を塞ぐ。
当然周りの少年達は愕然。

「……………工藤新一って…ロリコン…?」

桜舞い散る季節、週刊誌の見出しには

『平成の名探偵工藤新一ロリコン疑惑! ?』の文字が躍った

7・桜舞い散る季節（後書き）

これは普通に短編として出そうと春まで温めていた小説なのですが・
最近このアクセス数がいいのでここに載せてみました。感想評価
お待ちしております。

8・涙で溶ける（前書き）

哀ちゃん一人称。少年探偵団と。

8・涙で溶ける

―長い夢を見ていた。

暗い黒い闇の中、狭い部屋で私はひたすらパソコンと実験器具に向かって
かっている。

必要とされているのは私自身ではない。

ただ、数式を並べることでできる私の頭脳だけ…

この頭脳さえあれば私という人間は必要とされない。

私の心は氷のように、冷たく、固く……………。

『…ちゃん、…いちゃん』

心配そうに誰かを呼ぶ少女の声が聞こえる。

私を呼んでいるの？

…バカね、私を心配する人なんていない。

心配されたとしたら、今手がけている研究が進まなくなること。
私自身の事など誰も心配したりはしない…

『…いばら。おい、灰原！』

はい…ばら…？

白い光が飛び込んできた。
周りにいる少年少女は…

ああ、そうだ。私は…

「哀ちゃん急に倒れちゃって半日寝てたんだよっ歩美心配したんだからっ」

「顔も蒼いし貧血じゃないんですか？」

「ちゃんと食わねえからだよ」今日は博士にうな重頼んでもらえよなっ

まだぼーっとしている私に今となっては見慣れた少年が声をかけてくる

「おい、オメー大丈夫か？名前言えるか？」

「…灰原哀。」

「歳は？」

「84歳…」

彼はニカッと笑う

「おっしゃ！いつもの灰原だ！…ってオメー何泣いてんだよ！」

そうだ、私はあの暗い空間にはいないんだ。
私という人間を見てくれる友人が…仲間がいる。

凍りついたところが涙で溶ける。

私は、灰原 哀。

9・雨宿り（前書き）

小五郎視点でコ哀です

9・雨宿り

「ったくなあゝんでこの名探偵毛利小五郎様があきんちよの為に小学校なんか行かなきゃいけねえんだっつの…」

世間で名推理（記憶にはないのだが）を称えられ、新聞、テレビ、あらゆるメディアを騒がせている背広姿の男は降りしきる雨の中子ども用の傘を1本ぶら下げて歩いていた。

愛娘には弱いもので、先程蘭から電話が入り

『コナンくん今日傘置いてっちゃったのよ。さっき電話したら適当に雨宿りして帰るって行ってたんだけど、止みそうにないし、多分まだ学校にいると思うからお父さん迎えに行つてあげてくれない？』と頼まれしぶしぶ帝丹小学校へと足を向けたのだった。

だいたいあのジャリガキいつも『テレビがテレビが』って言うてるくせに天気予報は見ねえのかよ…まったく…変なことにはばかり興味持ちやがって。

「お、いたいた…ったく」

玄関で空を見上げるコナンを見つけ、歩み寄ろうとしたその時…

「あら、平成のホームズさんも天気は推理できないわけ？」

妙に大人びた口調のガキがあいつに話しかけてきた。ありや確か博士んちで預かってるって子だな。

「んなこと言っただって忘れちゃったもんは忘れちゃったんだよ。灰原くっ近いんだから入れてってくれよ」

ははあゝんなるほど。

そーいやこいつしっかり新聞に目え通して出かけてやがったな。つまり・・・

「仕方がない人ね・・・どうせ博士のうちにくるつもりだったんでしょう？構わないけど、傘は貴方が持ってよね。」

小さな二人組みが一つの傘に入って帰っていく。

あのがき、好きな子の傘に入るためにわざと傘忘れていきやがったな。

「あんのマセガキめ・・・」

悪態づきながら小五郎は少し笑みを浮かべて二人の姿を見送った

10・ベッドの中(前書き)

CP新哀です

10・ベッドの中

「ちょっと・・・そろそろ起きてよ・・・布団、干したいんだから・・・」

哀がいくらゆすっても名探偵は起きる気配を見せない。

毎晩毎晩事件の資料やら、ミステリーやら、読んでいるのは構わない。

自分だって夜行性なのだから気持ちはわからなくもない。

昼間やる気のしない事が夜になると急にあれもこれもとやりたくなるし、なぜか作業もはかどる気がする。

とはいえ、もう昼過ぎだ。

いい天気だし、せっかくの休みだ。布団を日に当てておきたい。

「ねえ・・・しんい・・・あつ」

気付けばベッドの中に引き込まれていた。

「ちよつと・・・起きてるんならベッドから出てよ・・・干したいんだから・・・」

「やだ」

甘えた声で新一は哀をきゅっと抱きしめて腕の中に収める。

「せっかく二人きりの休日なんだ・・・こうやってゆっくり過ごすのだって悪くねえだろ？」

寝起きの新一は性質が悪い。

ワガママだし、妙に甘えてくる。

・・・世間が知ったら大変ね・・・

平成のホームズと言われているこの人が小学生の私に甘えているなんて・・・

「ねえ・・・ゴハンは？」

「いらね。哀がいい。」

まったく・・・動きそうにないわね・・・

ふうつと溜息を吐きつつも哀は諦めて新一の腕の中に納まった。

本当は私もこうしている時間は心地よくて好き、なんて言ってあげないけど。

布団を干すのは次の晴れた、ワガママな探偵さんのいない日にしよう。

11・犬と猫の関係

ピンポーンピンポンピンポンピンポーン

朝早くから工藤家のチャイムが鳴り響く。
こんな事をするのは・・・

「だあゝ！！なんの用だ蘭っ！！！」

ただの幼馴染として付き合っている今でも、いや、ただの幼馴染だからこそ蘭は新一に時たま無茶な事を言い出してくる。

蘭の腕の中には見覚えのある、グレーの毛並みの子猫。

「お母さんに頼まれてゴロちゃん預かってたんだけど、今日どうしても出かけなきゃいけなくなっちゃったの。お願い新一預かって！！」

蘭のお願いは『お願い』ではない。

断ったら玄関のドアでも、靴箱でも、新一自身も・・・壊されかねないのだ。

「いや・・・でも・・・」

「あゝ!!!!!! あたしもう行かなくちゃ!じゃ、頼んだわね!」

応とも否とも答える前に蘭はゴロを新一の腕に押し付けて走り去ってしまった。

呆然と立ち尽くす新一にゴロは腕の中でニャアと甘い声をあげる。

別に・・・ちょっと前までなら問題はなかったのだが・・・。
振り返ると視線の先には子犬を抱えて眠る哀の姿。

数日前に哀の後に着いてきてしまい、元来動物好きの哀は元の場所に捨てに行く事が出来なかった。

博士の家で買うのは気が引ける、と妙な遠慮をしていたため新一が

「うちで飼えばいい」と提案したのだ。

哀が新一の家に足を運ぶ回数を増やすための企みでもあったのだが。
哀は嫌がらせのように子犬に「コナン」と名づけて可愛がっている。
新一への愛情表現とは比べ物にならないほどに。

(俺よりコナンのが好き、ってか?・・・ったく)

コナンの方も哀にべったりで新一には餌をやる時と散歩に行くときに寄ってくる程度だ。

とにもかくにも預かってしまったものは仕方がない。

新一はゴロを抱えてリビングへと戻った。

「・・・しんい・・・あら、どうしたの?そのコ・・・」

目が覚めた哀は新一の腕の中のゴロに目が釘付けである。

(本当に人間より動物の方が好きなんだからこいつは・・・)

「妃センセのこの猫。ゴロっつーんだ。今日誰も面倒見るやついねえからって押し付けられちゃった」

やっぱまずかったかな？という口調を向ける新一だったが哀の瞳はもう子猫に釘付けである。

かわいい・・・

口に出してないのにそう瞳に書いてある。

「おいで、ゴロ・・・」

と、哀が手を伸ばすと・・・

キャンッ！！！！

コナンが哀の袖を引っ張る。どうやら新参者のゴロにやきもちを妬いているらしい。

「大丈夫よ、コナン。私の一番はコナンだからね」

哀はやさしく子犬の頭を撫でる。

（・・・っつーことは何か？俺は犬の次かよ・・・）

「博士とあの探偵さんも貴方には敵わないんだから」更に哀は付け加えた。

（博士よりも下かよ・・・親みたいなんだし・・・しゃあねえけどよお・・・）

しかしまたゴロはゴロで新一の腕から降りようとしなない。

哀にも興味はあるが新一から離れたくない、といった様子である。

（おいおいおい・・・蘭のやついつ迎えに来るんだよ・・・）

数時間後。

蘭が迎えに来ると新一も哀もぐったりとソファーに座り込んでいた。新一の腕の中にはゴロ。哀の腕の中にはコナンがすっぽりと収まっ
てはいるのだがお互いは微妙な距離を保ちつつ心を開き始めている
ような様子。

「なんか・・・そのコたちコナンくと哀ちゃんみたいね。」
蘭はクスッと笑って「じゃ、ありがと」と言ってゴロを引き取っ
ていった。

11・犬と猫の関係（後書き）

ゴロ↓哀ちゃん、コナン↓コナンくん、みたいという意味ですね。
蘭ちゃんはコナンくんの正体は知らない、って設定で

12・長い恋

夕暮れの帰り道。

見覚えのある赤みがかった茶髪の少女がひとり、歩いていた。それに気づき私は声をかける。

「哀ちゃん、今、帰り？」

「蘭さん・・・ええ、買い物して、今からかえるところです。」

「少し、お話、しない？ふたりでゆっくり話したことないし。」

まだ親友の園子にも、大阪にいる似たもの同士の友達にも話していないことだけれど、なぜだかこのコに聞いてもらいたい。

いや、本当は理由はわかっている。

自分はどこまで世話好きなのだろうかと溜息も出るが、それでもなきやうまくいきそうにもない

「・・・ええ・・・構いませんけど・・・」

少女は遠慮がちに答えた。

この子はいつも私と距離を置く。

なのに私はこの子が気になって仕方ないのだ。放っておけないのだ。

たまに求めるように私を見上げるのに、決して甘えてきたりはしない大人びた少女。

彼女になら話す気になれた。

「あのね、私、新一って幼馴染がいるんだけど・・・あ、哀ちゃんの隣の家だから知ってるかな？随分と行方不明だったんだけどついこの間帰ってきたのよ。」

「・・・はい、この間お会いしました。工藤さん、ですよね？」
少女は節目がちに答えた。

「私ね、あいつが初恋でさ・・・笑っちゃうでしょ？高2にもなっ
てあいつ以外を好きになったことなかったの。当然あいつもそうだ
と思ってたんだけど・・・とんだ思い違いだったみたいでさ。」

少女は更に俯いて相槌も打たない。

この子は変に相槌を打ったりせずにしっかり話を聞いてくれるんだ。
園子や和葉ちゃんならもうこの時点で多数の質問が飛んできてなか
なか話が前に進まなそうだ。

「帰ってきてね、あいつひと言目に言ったの。『オメーのこと、好
きだった。初恋をありがとう』ってね。」

「・・・工藤さん、蘭さんの事を振った・・・ってことですか？」

「ううん、告白もしてないし付き合ってもなかった。振られたも何
も片思いで終わっちゃったのよ。それでね、アイツ好きな人ができ
たみたいなんだけど・・・振り向いてもらえないみたいなんだよね。
なんかさ、私はもう吹っ切れたし、せっかくなら新一には幸せにな
ってほしいんだ。そうじゃなきゃ私のこの長い長い恋が叶わなかつ
た意味がなくなるじゃない？」

少女は瞳を揺らして初めて私の顔を見上げた。

「そうすることで……彼が貴方のところへ帰ってくるとしても……?」

新一が彼女に振られれば私のところに来てくれるかもしれない。確かにそんな考えも最初は少し脳裏を掠めた。でもそんなのは望んだものではない。

「そんなことで新一の隣に立てたって嬉しくないよ。それより新一に本当に好きな人と幸せになってほしい。初恋は叶わないものだし……ね?」

「どうして……私に?」

「さあ? どうしてだろう? あ、そろそろ夕飯作らなきゃ! じゃあね! 哀ちゃん。」

またね、とは言わなかった。

彼女とはきつと違う形で会うだろう。

新一はきつとコナン君だった。

そしてコナン君は哀ちゃんのことを特別な目で見ていた。

新一がコナン君であり得たならきつと彼女も……。

数週間後。私の予感は見事に的中する。

「蘭、紹介するよ。俺の恋人、宮野志保。」

そう言われて微笑みかけてきた女性は、赤みがかった茶髪の美しい女性だった。

長い長い恋が終わりを告げたけど
心はなんだかすっきりしていた。

新一、しあわせになってね・・・。

12・長い恋（後書き）

一応新志・・・？

蘭ちゃんをどうしても悪者にできない筆者です。蘭ってこういう子だと思っんです。もめるとしたしたら園子とか和葉が蘭のために、って感じになると思うのでこういう展開を盛り込んでみました

13・走る走る！(前書き)

7・深い森の迷路と同じ設定ですので先に読むのをオススメします。

ない。

せいぜい2，3分早くなる程度だろう。

でも明は1秒でも早く志保の胸に飛び込みたくて必死で自宅までの道を走り抜けた。

いつもは怖くて足がすくんでしまう大きな犬のいる家の前も挨拶してくれるおばさんたちも構ってはいられない

とにかく走る走る！

「た．．．ただいまあっつ！．．．！！！！！！」

大きな声で玄関の扉を開け放つ．．．

ん．．．．？

ママはパパに何度も言われていたはず．．．

『俺がいないときは絶対に鍵かけとけよ！！！！』

ってことは……
ってことは……

「よお明、早いな」

予想通り、そこにはパパの姿。

こんなに必死で帰ってきたのに……

残念、明は新一に持ち上げられていた。

「言ってんだろ？ ママは、パパのもんだって。」

「パパってば『めいたんてい』なのにお仕事行かなくていいの？
『ケーサツ』は？」

「バーロオ。名探偵だから、もう帰ってきたんだよ」

いつもの応酬に志保は溜息を吐きながら明に助け船を出す。

「明、ランドセル置いて手洗っていらっしやい。おやつあるわよ。
新一、明を離して。」

その言葉で明はやっと新一から解放され手を洗いに……行くふり
をして志保に抱きついた。

「あつ明テメー……！」

「ちよっと貴方。子ども相手にムキにならないでよ。大人気ない。」

志保の影で明は舌を出して新一に子どもらしからぬ笑顔を向けてくる。

「ぼくおっきくなったらママと『ケッコン』するんだから！！！！！」

明の思わぬ発言に夫婦は目を合わせて吹き出した。

「なっなにがおかしいんだよっぼくはママが大すきだからママと『ケッコン』するの！」

可愛い発言の息子に志保は目線を合わせてそっと言った。

「ありがとう、明。ママも明が大好きよ？でもね、結婚はひとりとしかできないの。明とママが結婚するならママとパパはバイバイしなきゃいけないのよ？」

新一は（そういう問題じゃねーだろ）と心の中でツツコミをいれつつ母親に任せようとその場を黙って見守る事にした。

「や・・・やだっ！！！！！！パパはいじわるだし、寝たらなかなか起きないし、だらしないし、けどぼく・・・ぼくパパも好きだもん！！！」

（聞き捨てならねえ台詞がいくつか混ざってんぞ我が息子・・・）

「そうでしょう？だからね、ママの結婚の相手はパパだけなの。明も素敵なお嫁さんがきつと見つかるわ？ママより好きになれる人がね・・・さ、手を洗っていらっしやい」

「わかった！」

明はパツと顔を明るくして洗面台のほうへと駆けていった。

「・・・まったく誰に似たんだか・・・」

「あら、貴方でしょ？ 私が好きでたまらないんだから。」

「でも俺の欠点ばっか見つけてくるのはオメー譲りだよな。」

「私達の子、ってことよ」

「・・・だな。」

13・走る走る！（後書き）

前回好評を頂いたので新志未来設定の続編です。

もう、このタイトルは明くんしかない。。。。笑

新一志保ほどいい夫婦になれるカップリングはないと思うんです！
新哀が一番好きだけどあくまで恋人設定・・・（とiiiiつつ夫婦も
のを企画中ですが）

私もこんな夫婦になりたいものですが夜中に熟睡している旦那を一人にしてPCに向かって小説更新・・・何をしてるんでしょうか・
・
・

14・雨だれ

工藤家の中でピアノの音が響く。

もちろん新一には弾きこなせない。

たまには弾きたいから・・・とい隣家の少女が奏でている音色だ。

「へえ・・・雨だれ、か。ショパンだな。」

「ええ。正確には24の前奏曲作品2第15番変二長調・・・ショパン、が最後の恋人

ジョルジュ・サンドと地中海の孤島マジョルカ島へ転地療養に行っていた時に作った曲よ。まあ、雨だれってタイトルはショパンがつけたものではないけど・・・貴方音痴なのに詳しいのね。」

「音痴なのに、は余計だっつもの。母さんが好きなんだよ。」

「このときのショパンの健康状態は悪化の一途をたどり陰うつな雨が毎日降り続く中で作ったそうよ・・・時期は10月。寂しい秋の長雨ね・・・私と一緒にだわ・・・」

ふっと降り続いている雨を窓から眺めて哀は言った。

そんな哀新一は後ろから抱きしめる。

「なあ・・・もう、本当に手はないのか・・・？」

哀の身体はもうボロボロだった。それに気付いたのがつい最近なのだから探偵としての自分が非常に情けなく感じられる。

新一のためにA P T Xの解毒剤の試作品を何度も自分の身体で試し、完成したときにはもう解毒剤を受け付けないどころか心臓に負担がかかりすぎ爆発寸前だった。

「ええ・・・今こうして生きているのが不思議なくらいだわ・・・だから・・・もう彼女のところに・・・」

「行けるわけねえ。時限爆弾がついていようがなんだろうが俺は最後までお前を抱きしめる。」

「バカ・・・」

そこへ一本の電話が鳴った。

雨だれのメロディの美しさ、明るさはこれから夏に向かう6月の雨を感じるよな・・・どんなに激しく降り続いてもいつか必ず上がり、いつの間にか柔らかい光が差し込んでくる・・・ような音に聴こえてくる電話が。

「アメリカ、行くぞ。お前を死なしやしねえ。」
顔の広い両親にこれで一生恩返しをしなければならなくなったが、な。

15・告白

「工藤君、好きです！」

「工藤先輩、付き合ってください！」

「工藤先輩・・・私・・・」

「くっ工藤君・・・あの・・・好き・・・です」

一体一日何人の相手をすりゃいいってんだ俺は・・・

まだ昼休み。朝からこれで7人目。

好意を持ってくれるのはありがたいが、答えられないからひたすら断り続けるしかない。

事務作業のように真剣な眼差しの彼女たちに

「ごめん、付き合えない」と告げるのが悪い事のように思えてくる。

『蘭とはただの幼馴染』

そう公言した途端にこれだ。

それ以前からあったことはあったがみんな蘭を恐れて近付いてもこない子が殆どだったのに・・・

これだけ毎日愛の告白をこんなに多くの人数から受けても一番ほしい人物からはもらえない。

それが隣の家に住んでいる小学校2年生だなんて世間に知れたらど

うなることやら・・・。
実際には年上だけど。

確かにアイツは俺の思いは受け止めてくれた。
ただいくら好きだと言っても返ってくる返事は決まって
『私もよ?』のひとこと。

十分に想いは伝わっている。
伝わってはいるけど・・・。

「やっぱり好きだ、って言われてえよな・・・」

いくらそう思っても、今日も帰ってからのやり取りはわかりきっている。

『哀、好きだ』

『何度も言わなくてもわかってるわ。』

『オメーは?』

『私もよ?』

仕方ねえか。あれが精一杯のアイツの告白。

そしてそういうヤツを好きになったのは、俺自身、だもんな・・・。

それに平静を装いつつアイツは少し頬を赤らめて小さな声でそう答えるんだ。

アイツなりの精一杯の告白、なんだよな。

さて、午後もなんとかして愛しい小さな恋人のもとへ早く帰らねば。

16・勘違い

僕、円谷光彦と言います。

帝丹中学1年生。一応成績はいい方だと自負しています。

自分で言うのもなんなんですが小学校のとき江戸川コナン君というとても頭のいい少年がクラスにいたんですが、彼が転校していつてからは、僕がかなり頭がキレる、という風に言われていたりもします。

そんな僕も普通の中学生。

恋している女性がいいます。灰原哀さんと言って、同級生でハーフのためか色素の薄い肌や髪色、そしてグリーンの瞳がとっても綺麗です。

「円谷君。」

そうこんな風に綺麗な声で呼んでくれたり……

「わっ灰原さんっ！」

「何をそんなに考え事していたの？円谷君にもわからない問題でもあった？さっきの数学……」

間近で見ると本当に美しいです。

「あ……いえ！それより何か僕にお話でしょうか？」

「ええ、……付き合ってほしいんだけど。」

・・・え？

途中ちょっと彼女に見とれていて聞いてなかったけど
彼女確かにこういいましたよね

『付き合っしてほしい』と

こんなところで言うことですか！？教室ですよ！！
でも・・・でも・・・こんなチャンス逃すわけにはいきませ
ん！

「はい！喜んで！」

「よかった。今日の放課後空いてる？」

いきなり放課後デートですかー！！大歓迎ですよ僕は！

「勿論です！」

「そう、じゃあ放課後にね。」

夢みたいです。

夢を見ているんでしょうか。

「灰原さんどこへ行きましょうかっ」

授業が終わって意気揚々と彼女に話しかけた僕に告げられた真実は

ものすごく衝撃的なものでした。

「あら、さっき言わなかったかしら？彼へのプレゼント・・・どんなものかいいかわからないから、見立てるのつきあってくれない？
って・・・」

「は・・・灰原さん・・・彼氏・・・いたんですか・・・」

「ええ。オヂサンだけどね・・・歩美ちゃんに聞いてなかった？」

そういつてクスリと笑う彼女は今までで一番綺麗でした。

きつと恋人を思わなければあんな顔は出来ないでしょう。

「さ、行きましょう」

デート・・・だと思っていたのに・・・

まあいいか・・・灰原さんといられれば・・・

16・勘違い（後書き）

憐れ光彦・・・ごめんね。

歩美ちゃんが光彦君に言わなかったのは彼の気持ちを思って、
うことにしておいてください・・・

17・永遠を誓う

なんとなくつけているテレビからお決まりの台詞が聴こえてくる。

『永遠に、キミから離れない・・・』

『永遠に・・・きつとよ・・・』

どうやら志保は毎週そのドラマを見ているらしく、珈琲片手にそのドラマを見つめていた。

「なあ、お前も永遠に・・・とか俺に言ってくれんの？」

ドラマが終わったところで新しい珈琲を志保に手渡しながら新一は尋ねてみた。

「さあ・・・永遠なんてわからないもの。明日死ぬかもしれないし？」

相変わらず縁起でもないことを平気で口にする。

「オメーなあ・・・」

「あら？だってそうでしょ？私だっていつ交通事故か何かに巻き込まれるかもしれないし、貴方だって犯人に返り討ちにされるかもしれないわ？永遠なんてあるかしら？」

「お前・・・ほんつとに可愛くねえな。」

度々新一は志保のことを『可愛くない』と評するが遠回りな褒め言葉であることは志保には通じているつもりだ。

一度園子の前で言ったら大変な目にあったが……

可愛くない、は変に夢見てない。

しっかり現実を見て生きている、という新一からの評価なのだ。

「可愛くなくて結構よ……私は本当の事を言ってるだけだもの」
そう言って志保は新一の淹れた珈琲カップのフチをくるっと一撫でした。

機嫌のいい証拠だ。

恋人同士にしかわからないやり取りはたくさんあるものなのだ。

例えばそれが一般のカップルにはわかりにくくとも……

「じゃあさ……」

新一は志保の後ろに回りそつと囁いた。

「工藤志保になってくんね？」

そう、それは毎日を共に過ごし

永遠を誓う、ということ……

17・永遠を誓う（後書き）

これ、18に続きます。よろしければ続けて読んで感想いただけるとうれしいです！

18・死すらも二人を別てない（前書き）

17・永遠を誓うからの続きです

18・死すらも二人を別てない

「・・・ふう。」

志保は今日何度目かわからない溜息を吐いた。

恋人は意気揚々。恋人の母は更に意気揚々。この日を心待ちにしていたようだが、志保はいささか複雑な心持でいた。

目の前には真っ白なドレス。

元女優の恋人の母親と、ブランドデザイナーの父代わりの人の恋人が何度も話し合いを重ねて作られただけのことはある。素晴らしい出来のドレス。

今からこれに袖を通すことになる。

（本当に・・・これを着ていいのかしら・・・）

純白のドレス。

自覚がなかったとはいえ仮にも自分は人殺しに加担していた罪人だ。

FBIの助けもあり、罪に問われる事はなかったが、だからと言って神聖なこの場所でこのような純白のドレスに身を包んでもいいものだろうか。

最愛の恋人の妻になれる喜びはある。

籍をいれるだけで本当は自分は十分だったのだ。

でも派手好きの恋人の母親と父親代わりの博士はそれを許さなかった。

『志保ちゃんにぜえ〜ったいキレイな花嫁さんになってもらうんだから!!』

まるで自分の事のようにまくし立てる恋人の母には勝てず、結局この日を迎えた。

「し・ほ・ちゃん準備するわよん♪」

何をそんなに使うのだろうかと言うほどのメイク道具を抱えて、数人のスタッフと一緒に有希子が控え室に入ってきた・

（観念するしかなさそうね・・・）

純白のドレスに身を包み、博士の腕を取り、夫となる恋人のもとへと歩を進める。
そして彼の手を取る。

お姉ちゃん・・・見てるかしら・・・

健やかなる時も
病める時も

喜びの時も
悲しみの時も

富める時も
貧しき時も

これを愛し
これを敬い

これを慰め
これを助け

死が二人を別つまで

共に生きることを誓いますか

神父がお決まりの台詞を口にする。
これに「誓います」と答えれば夫婦と認められる。

が、夫となるその人は違う言葉を口にした。「いえ、それは誓えません。」

会場がざわつく。それもそのはずだ。
こんなことを言う新郎が前例にあっただろうか。

「おい、工藤何言ってるんだ！」

「新ちゃん！」

「新一君！」

様々な声が飛び交っている。

やはり私を妻にはできな・・・

志保がそこまで考えたところで新一は更に言葉を繋げた。

「俺達は死すらも別てない絆で結ばれてるんだ。『死が二人を別つまで』なんて期限付きの誓いはできません。」

先程までのどよめきが歓声に変わる。

「やるじゃねえか工藤！」

「さすが新ちゃん我が息子！」

「もゝどつきりさせないでよゝ」

「相変わらず気障やなゝ」

そうだ、私の愛した人はこういう人。

「私も、彼に同意見・・・です」

頬を染めながら今日くらいは、と志保も神父にそう告げた。

神父は困った顔をしつつも

「では、こうしましょう。」

健やかなる時も

病める時も

喜びの時も

悲しみの時も

富める時も

貧しき時も

これを愛し

これを敬い

これを慰め

これを助け

共に歩み続ける事を誓いますか

「はい、誓います」

「誓います」

そう、ふたりの絆は

死すらも、二人を別てない

18・死すらも二人を別てない（後書き）

この話が一番書きたかったんです！！

死が二人を別つまで・・・ってなんだか現実的すぎませんか？

きつと新一くんならこう言ってくれるはず。という作者の願いです

19・いつも目が合う

最近転入してきた女の子。宮野志保さん。

綺麗な肌と赤茶の髪。そしてグリーンの瞳・・・
どうやら工藤の知り合いらしいが、工藤には毛利がいるし、狙って
もいいだろう。

俺の視線は彼女に釘付け。
それに俺の勘違いでなければ・・・彼女もよく俺のことを見てる。
いつも、授業中に目が合うんだ。

それにしても綺麗だ・・・頬杖について彼女を見つめる。
・・・と、アゴの肉が少々気になった。

（最近ちょっと顔周り太ったかなー・・・）

「・・・中道君・・・だったかしら？」
気付けば授業が終わっていた。そして目の前には憧れの彼女！とう
とう俺に話しかけてくれた！

・・・が、隣には工藤。
なんでだよ・・・。

「ねえ、失礼かもしれないけど、貴方最近顔周りが肥大した、って
感じることはない？」

「・・・・・・・・・・は？」

初めての会話でそれ・・・？
それに『顔周りが肥大した』ってどういうことだ？

「中道、コイツ最近オメーの顔がでかくなってねえか、って聞いて
んだけど、どうだ？」

工藤の通訳により理解する。

「あ、ああ確かに最近ちよつとずつアゴ周りが気になっちゃいるけ
ど・・・・・・・・なんで？」

俺が不思議に思っただけると宮野さんではなく工藤が口を開いた。

「だよ。志保。」

「そう・・・やっぱり可能性あるわね・・・他の部位が太ったって
事はないのよね？」

「え？あ、ああ・・・他には気になるところはねえけど・・・・・・・・なん
で？」

俺の頭の中はハテナマークだらけ。

なんで気になる女の子と顔が太ったのどーのって会話しなきゃいけないんだ？

「・・・中道君、貴方アクロメガリーの可能性があるわ・・・一度、検査を受けたほうがいいわね・・・」

「あく・・・？」

「アクロメガリー。先端巨大症とも言われて顎や顎、手足など身体
の先端が肥大する病気よ・・・頭痛や高血圧を伴うものなんだけど
・・・貴方最近そういう症状を感じたことは？」

わけのわからない言葉が並べられているが・・・とりあえず頭が痛
くなったりしないかを尋ねているらしい。

「頭痛くなったりすることはあるけど・・・でもただの寝不足だと
・・・」

「アクロメガリーはね、ゆっくりと進行するし、その症状も一般的
なものが多いから気づかない場合が多いのよ。でもこうした肥大は
外見だけでなく内臓系統にも起こり、特に心臓・血管系が肥大する
と、心不全など重大な障害が起こることもあるわ。軽く見ちゃいけ
ないの。最近貴方の顔の様子を観察させてもらってたけど、若干の
肥大が見られるみたいだし・・・まあ私の視診だけじゃどうしよう
もないし内分泌科や脳神経外科などで、成長ホルモンやインスリン
様成長因子の量を調べる血液検査を受けた方がいいわ・・・」

なんだ？なんなんだこの子は・・・？

それに目が合う、と思ってたのに俺の・・・

顔の様子を観察・・・？

「く・・・工藤？宮野さんって・・・？」

「ああ。俺の主治医。博士号まで持ってたんだぜ。アメリカ生活長かったからこつちきて高校生活を体験してる、ってわけ。」

工藤はけろっと言ってるのける。

「あ、あと俺の彼女だから手出すんじゃないぞ、中道。」

「じゃあ、そういうことだから一度病院に言ってね、中道君・・・」

そう言ってふたりは肩を並べて帰っていった。

淡い気持ちちが打ち崩された上に・・・なんだかよくわからない病気の可能性？

帰りに米花病院寄るか・・・

俺、あそこに縁あるなあ・・・

19・いつも目が合う（後書き）

中道君は新一のサッカー部の友達。本編にも何度か登場していますね。
しかし可哀想なことをしてしまいました・・・w

20・先生と生徒

6年生になったとはいえやはり簡単すぎる内容の授業。
今日明日もいつもと同じ退屈な授業・・・のはずだった。

朝のHRが始まるまでは。

持ち上がりで担任になった小林先生がガラリとドアを開けて教室に入ってくる。

その後ろに見覚えのある男性・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！！！」

「今日から教育実習で2週間みなさんと一緒に勉強します。工藤新一さんです。みんなよろしくね。」

先生がにこやかに紹介したのはそう。

毎日寝起きを共にしている恋人、工藤新一その人だったのである。

確か・・・確かに教育実習に行く、とは言っていた。

でも帝丹小だなんて！

しかも私のクラスだなんて聞いてない！

新一はニコニコと哀の席を見つめている。

(2週間・・・最低・・・)

「ちょっと・・・どういふこと？」

工藤家へと帰ってきた哀はすこぶる不機嫌だった。

「言ったろ？俺、小学校教育課程の教育実習行く、って。」

確かにそれは言っていた。取れる資格は取っておいた方が探偵としても役に立つとかなんとか言っただけで教員免許を取得する。今回は小学校の実習だ、と。

「でもうちの学校に来るなんて聞いてないわ・・・しかもうちのクラスだなんて・・・」

「哀は知らねーかもしれないけど、教育実習は基本的に母校でやるの。そして俺らが1年の時から帝丹小にいる小林先生はもう学年主任・・・となりゃ、そのクラスに配属されんのが妥当だろ？」

そう、教育実習は特に希望がない限り通いやすさも考慮し基本的に出身校で行われ、それなりに指導力のある教師のクラスに配属されるのだ。

新一は何も手をまわしたわけではないが、こうなることは当然予想していた。

「教師と生徒。なんかいいじゃん♪」

「……」 ♪ってなんなのよ……♪って。

しかし苦勞するのは結果的に新一のほうである事をこのとき新一はまだ知らない。

「じゃあ、工藤せんせ。生徒には平等に接して頂かないと。私も工藤先生って呼ぶから貴方も名前で呼んだりしないで頂戴ね……あと、むやみに触ったりしたらセクハラで大学に届け出るから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4722g/>

コイスルキモチの短編集

2010年10月10日00時41分発行